

Newsletter

—学会会報—

The Japanese Society for Curriculum Studies

発行：日本カリキュラム学会事務局

目 次

〈理事会報告（2023 年 11 月 4 日）〉

■ 審議事項

- I 第 34 回大会（大阪教育大学大会）の大会報告及び収支決算報告
- II 次回大会（第 35 回筑波大学大会）について
- III 各種委員会の活動について
- IV その他

■ 報告事項

- V 事務局報告

〈第 34 回大阪教育大学大会（2023 年 7 月 8 日）の報告〉

〈日本カリキュラム学会 第 14 回研究集会のお知らせ〉

〈事務局からのお知らせ〉

理事会報告（2023 年 11 月 4 日）

出席者：石田理事、磯田理事、上野理事、奥村理事、川地理事、唐木理事、木原理事、金馬理事、黒田理事、倉本理事、子安理事、澤田理事、柴田理事、高橋理事、田村理事、中野理事、西岡理事、二宮理事、根津理事、藤本理事、松下代表理事、的場理事、森理事、吉田理事、香川大学附属高松小学校（計 25 名）

事務局：竹川事務局長、富士原理事、次橋幹事（計 3 名）

定例理事会が、2023 年 11 月 4 日（土・祝）10 時から 12 時 30 分まで、Zoom を用いたウェブ会議形式で開催された。事務局 3 名を含む 28 名（うち理事 27 名）の参加があった。

審議に先立ち、松下代表理事より、開会に関する挨拶が述べられた。

■ 審議事項

I 第 34 回大会（大阪教育大学大会）の大会報告及び収支決算報告

木原理事（第 34 回大会実行委員会委員長）より、資料に基づき、総括的報告が行われた。[本 Newsletter の 5～6 ページに報告文を掲載]

第 34 回大会から、とくに参加登録等事務作業におけるオンライン化をすすめた結果として、受付がスムーズであったことなどのメリットがあったこと、またオンライン化にまつわる大きなトラブルは生じなかったことが報告された。また、参加者数、自由研究発表、課題研究、シンポジウム、自主企画セッションの概要についての報告と、円滑な運営への協力に対する御礼が述べられた。

続いて、田村理事（第 34 回大会実行委員会事務局長）より、資料に基づき第 34 回大会の収支決算報告が行われた。新システムのセットアップ、業者の職員派遣の person 費など、委託業者変更等にもなう新たな諸支出が生じたものの、大阪教育大学の協力による会場費の削減などもあり、最終的に 226,185 円の黒字であったことが報告された。

II 次回大会（第 35 回筑波大学大会）について

樋口理事（第 35 回大会実行委員会委員長）より、資料に基づき、現状報告が行われた。

次回大会は、2024 年 7 月 6 日（土）7 日（日）の 2 日間、筑波大学・筑波キャンパスにて開催されることが確認された。タイムテーブルについては、使用する会場数の制約上、自由研究発表の時間を 30 分長めに設定し、発表者が多い場合に備えることが提案された。これに対し、二宮前事務局長より、学会賞の表彰式に十分な時間を確保する観点から、総会時間にゆとりを持つ方が良いとの指摘があった。自由研究発表の時間延長については承認され、総会の時間の延長や全体のタイムテーブルについては今後の大会実行委員会での検討事項となった。会場費についての懸念事項が指摘されたが、唐木理事（同大会事務局長）より、大会で使用する棟を限定することで、会場費は多くとも 20 万円程度に抑えられる見込みであることが説明された。

III 各種委員会の活動について

1. 学会賞委員会

磯田委員長より、資料に基づき、報告が行われた。

まず、優秀発表賞の選考プロセスの報告および候補者の発表がなされた。優秀発表賞については、2023 年 3 月の理事会において「審査委員については利益相反関係のない者を学会賞委員会で選出する」という方針が確認されており、最終候補者が出揃った段階での委員選出となったこと、選考プロセスに問題がないことも確認された。そのうえで、当該の最終候補者を受賞者として推薦するとの審査委員会提案が承認された。

次に、研究奨励賞については、候補者のうち 2 名の推薦が多数であったため、2 名に絞って審査委員会で最終審査を進めることが確認された。なお、本件に関連して、細則においては「上位 3 名」とあるが「上位 3 名を基本として」と改定することが承認された。また、優秀発表賞と研究奨励賞を同一人物が受賞しても問題にはならない、ということも確認された。

学会賞の受賞候補者を第一著者に限定するかどうかについての議論がなされた。現状では発表や研究にどのように貢献したかを候補者自身に照会することになっていること、規定には記されていないものの細則には第一著者とすることが記されていることが確認された。そのうえで、他の教育系学会同様に本学会の規定にも「ただし両賞とも、共同研究の場合は第一著者であることを条件とする」ことを明記することが提案され、承認された。また、本学会では第一著者をファーストオーサーと同義とすることが確認された。

2. 紀要編集委員会

澤田委員長より、資料に基づき、報告が行われた。

今年度より導入されたオンライン投稿・査読のシステムに関連して、投稿時のトラブルとそれに伴う締め切り延長措置に至る経緯について、説明がなされた。

続いて、査読の協力に感謝が述べられ、今後のスケジュールについて確認がなされた。また、投稿論文の文字数を遵守させるための方策について議論を行った。松下代表理事から、テンプレートは提示しているものの最終ページの途中で終わらなければいけないという現在の規定が文字数オーバーを招く可能性もあり、フォーマットのあり方については引き続き紀要委員会で検討してほしいとの要望が述べられた。

3. 国際交流委員会

倉本理事より、資料に基づき、報告が行われた。

学会年次大会課題研究、海外カリキュラム研究情報の執筆依頼と進行状況の報告に加え、「3. 新プロジェクト（国内外の関係学会との連携・共同研究）」として、WALS との連携・共同研究を念頭に置き、lesson study とカリキュラム論との接点を論じるシンポジウム（オンライン）の提起が概案としてなされ、議論が行われた。

国際交流委員会では、授業研究とカリキュラム研究の接点を探していく、というコンセプトで向こう 3 年間のビジョンを持っており、上記シンポジウムはあくまで一つの方向性を示した概案であることも説明された。報告に対して、lesson and curriculum study にするなどしてカリキュラム学会らしさを出してはどうかという意見が出された。また、lesson study あるいは lesson studies といった言葉を用いる際には海外でのニュアンスも踏まえて慎重になるべきであるとの意見も出された。

4. 研究委員会

田村副委員長より、資料に基づき、報告が行われた。

次回大会における2つの課題研究のテーマとコーディネータ案が提案された。

また、研究集会について、「アメリカの科学教育カリキュラムと探究学習」（仮）として大貫守会員ともう一人の報告者の登壇を予定していることが報告された。実施形態については、ハイフレックスは技術的にも労力的にも負担が大きいため、対面かオンラインのいずれかで実施を検討していることが確認された。これに対し、竹川事務局長より、3月の理事会はオンラインで行われるので、日程を理事会に合わせる必要はないということが述べられた。そのうえで、日付および方法、参加資格を学会員に限定するかどうかについて、委員会内で早急に検討するように要望が出された。

5. 広報・若手育成委員会

唐木理事より、資料に基づき、報告が行われた。

「秋のセミナー」を2023年11月23日に、「若手育成企画」を2024年2月23日に開催すること、次回大会での課題研究については「カリキュラムの『不易と流行』を語る」を企画していることが報告された。

また、「若手育成企画」については、これまでは年齢制限があったが、引き続き設けるのかについて質問がなされた。委員会としては大学院生を対象として想定しているが、今後議論をしていくことが述べられた。前委員長の根津理事より以前は「学生会員」に制限していたことも述べられた。

IV その他

とくになし。

■報告事項

V 事務局報告

竹川事務局長より、会員現況、寄贈図書、会計（途中）について報告が行われた。また、ニューズレターに現状記載されていない理事会出席者を今後は記載してはどうかという提案がなされ、出席者のみ掲載することが承認された。このほか、学会ウェブサイトにおいて、現状では前年度分までの紀要目次を公開しているが、最新の本学会の関心領域を示すためにも当該年度の紀要目次まで掲載してはどうかという提案がなされ、承認された。

松下代表理事より、2025年度の大会校については当該大学の理事に現在打診中であることが報告された。

第 34 回大阪教育大学大会（2023 年 7 月 8 日）の報告

文責：第 34 回大会実行委員会委員長 木原俊行

日本カリキュラム学会第 34 回大会は、新型コロナウイルス(COVID-19)が感染症の第 5 類に位置づけられたため、対面形式で、2023 年 7 月 7 日(土)・8 日(日)に、大阪教育大学で開催された。対面形式での大会開催は、4 年ぶりであった。雨天予報であったが、幸い、雨の影響をほとんど受けることなく、大会を終えることができた。

大阪教育大学が会場校となるのは、2 回目となるが、前回（第 4 回大会）は柏原キャンパスでの開催であった。第 34 回大会は、交通の便を考慮し、天王寺キャンパス（西館）で催すことにした。会場が異なる上、30 年の時を経ているので、第 4 回大会実行委員会メンバーは誰一人残っていない。そのような状況の中での大会開催となった。

そして、第 34 回大会の企画・運営は、学会事務のそれと並行して、オンライン化を進めた。例えば、大会参加登録及び参加費の支払い、発表申込や要旨の送信、資料のアップロード等を学会ホームページから会員が進めることができるようにした。この方向性は昨今の他学会の取り組みからしても、また、本学会の前回大会等の Web 大会の成功からしても望ましいと考えた。しかしながら、その導入が学会事務の業務委託先の変更時期と重なったため、大会のご案内が遅れたり、発表申込期間が短くなったりするなどの課題が生じた。この点、会員の皆様に不安を生じさせたり、ご迷惑をおかけしたりしたことをお詫び申し上げたい。それでもなお、このオンライン化にまつわる大きなトラブルは生じなかった。そのため、次年度以降の大会においても、その充実が図られることと思われる。

参加者数は、事前参加登録・当日受付等を合わせると、302 名となった。前記したように参加登録等のオンライン化を進めたため、受付で、名前・所属等が印字された名札をケースに挿入してお渡しすることができた。また、発表要旨集も Web 大会の実績に学び、事前にホームページからダウンロードできるようにしておいたので、来場の際の受付は極めてスムーズであった。ちなみに、参加証、参加費の領収書を「マイページ」からダウンロードしていただくことも、Web 大会の取り組みを継承させていただいた。

自由研究発表では、54 件の発表申込があり、2 日間で 16 分科会が実施された（前日、1 件が発表取り止めとなった）。例年の大会どおり、各分科会は、3～4 件の発表で構成され、分科会の最後には全体討議の時間が位置づけられた。各分科会は、2 名の司会者により運営された。司会役を務めてくださった理事等の方々のお力添えにより、自由研究発表の分科会はいずれも滞りなく、進められた。なお、前回大会から始まった「優秀発表賞」には、7 件のエントリーがあった。現在、学会賞委員会で規程に従って、審査が進められている。

課題研究は、例年通り 4 つのテーマで企画・実施された。課題研究 I は、「カリキュラム・マネジメントの実質化における現状と展望」というテーマで、吉富芳正氏（明星大学）、村川雅弘

氏（甲南女子大学）、奥村好美氏（京都大学）の3名が発表し、各学校におけるカリキュラム・マネジメントに関する現状分析等がおこなわれた。司会は、吉田尚史（山形大学）と西岡加名恵（京都大学）であった。課題研究Ⅱは、「インクルーシブ教育をめぐるカリキュラム研究の今後を展望する」というテーマで催された。羽山裕子氏（滋賀大学）、是永かな子氏（高知大学・非会員）、野口晃菜氏（一般社団法人 UNIVA・非会員）の3名が発表し、国際的視野から、インクルーシブ教育をめぐる今日的課題についての議論が行われた。司会・コーディネータは、澤田稔氏（上智大学）と柴田好章氏（名古屋大学）が務めた。課題研究Ⅲでは、『『特別の教科道徳』の功罪』というテーマの下、松下良平氏（武庫川女子大学・非会員）、服部敬一氏（大阪成蹊大学・非会員）、西野真由美氏（国立教育政策研究所）による発表が行われた。道徳の特別教科化が道徳教育のカリキュラムに与えた影響やその課題について多角度で議論された。司会・コーディネータ役を果たしたのは、上地完治氏（琉球大学）と北尾悟氏（奈良女子大学附属中等教育学校）であった。課題研究Ⅳは、「カリキュラムの『不易と流行』を語るⅢ－カリキュラム研究方法論の批判－」というテーマで実施された。この課題研究は、複数回にわたって実施されているが、今回は、「カリキュラム研究方法論」について、長尾彰夫氏（大阪教育大学名誉教授）に話題提供していただいた後、白井智美氏（大阪教育大学）が論点整理をおこなった。司会・コーディネータは、富士原紀絵氏（お茶の水女子大学）、根津朋実氏（早稲田大学）が務めた。

シンポジウムは、「ダイバーシティとカリキュラム」というテーマで、八田幸恵氏（大阪教育大学）により企画された。当日は、木原が司会役を務めた。登壇者は竹川慎哉氏（愛知教育大学）、南浦涼介氏（広島大学）、そして森本和寿氏（大阪教育大学）であった。竹川氏は、ダイバーシティが重視される社会的背景や政治的・教育的潮流を整理した後、多様性自体を問い直すカリキュラムの可能性を、批判的リテラシー教育を手がかりに述べた。南浦氏は、ダイバーシティに関わるカリキュラムの類型を提案し、いずれのタイプの場合であっても、「言語的対応ができる」「カリキュラムのモディフィケーションができる」教師を育成する必要性があることを示した。さらに、森本氏は、カリキュラム研究におけるダイバーシティへの視点を自伝的手法に象徴的に見出しつつ、それを体現している実践例を語った。これらの若手研究者の論説に対して、対面と遠隔の会場の参加者によってコメントが示され、それに基づいて密な意見交換がなされた。

大会2日目の最後の企画として、自主企画セッションが開催された。いずれも、探究学習をキーワードするものであった。1つは、伊藤実歩子氏（立教大学）の企画による「世界の総合・探究学習を考える」である。もう1つは、田中孝平氏（京都大学大学院）石田智敬氏（日本学術振興会特別研究員 PD）、松下佳代氏（京都大学）の企画による「探究学習の多様性の検討」である。大会2日目の遅い時間帯のセッションであったが、多くの参加者を得て、活発な議論が繰り広げられていた。

久しぶりの対面での大会開催、再度のコロナウィルスの感染拡大の恐れ、大会運営のオンライン化推進等々、様々な課題はあったが、無事に大会を終えることができた。それは、松下代表理事、二宮事務局長をはじめとする理事の先生方のご支援、会員の皆様のご協力によるものである。大会実行委員会を代表して、衷心より御礼申し上げます。

日本カリキュラム学会

第14回 研究集会のお知らせ

代表理事: 松下 佳代

研究委員会委員長: 上地 完治

テーマ

科学教育における「探究的な学習」の理論と実践

趣旨

本研究集会では、まずアメリカにおける科学教育の文脈での探究的な学習に関する著書を出版された若手研究者にその研究成果を報告してもらい、その後、子どもたちの探究的な学習の実践例を学校現場から紹介していただくことで、科学教育における探究的な学習を理論・実践の両面から立体的に捉えて、理解を深めることを目的としている。

理論的報告は、2023年に『アメリカにおける科学教育カリキュラム論の変遷—科学的探究から科学的実践への展開—』を出版した大貫守会員に担っていただく。大貫会員には、1950年代以降のアメリカの科学教育における科学的探究の動向や、探究的な学習の取り組みについての議論をまとめてもらうとともに、「探究的な学習」の到達点と課題について総合的に検討していただく。

実践的報告は、大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎で理科・地学を担当されている井村有里教諭にお願いした。井村氏は生徒たちが研究者の視点を持つことを目指し、羽毛恐竜復元をテーマとした英語・美術・生物・数学との教科横断授業に取り組んでいる。当日は、研究班で復元に必要な情報を収集し、まだ正解のない復元図および模型を制作する授業プログラムを通して、縦割りされた科目どうしの知識・考え方を結びつける必然性と、科学の人間臭さを生徒達に実感させる試みについて報告していただく。

日時: 2024年3月16日(土) 13:00-16:00

(※15:30~16:00はオンラインで交流会を実施します)

参加方法: オンライン (Zoom ミーティング又はウェビナー)

※12:40頃から入室可。

報告者:

○大貫 守会員 (愛知県立大学)

○井村有里氏 (大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎)

司会

上地完治 (琉球大学)、田村知子 (大阪教育大学)

コーディネーター

上地完治、田村知子、鶴川護 (香川大学教育学部附属高松小学校)

参加費 無料 (学会員でない方にもご参加いただけます)

参加申込について

参加希望者は学会ホームページから、「2024年3月12日(火)」までにお申し込みをお願いします。申込者には登録メールアドレス宛に自動的に接続情報が送付されます。届かない場合は、「迷惑メール」のフォルダに入っていないかご確認ください。接続情報が記載されたメールを紛失した場合は、再度お申し込みください。

事務局からのお知らせ

1. 会員現況報告 (2023年10月17日時点)

■会員総数 705名 (一般会員622名、学生会員77名、団体会員6名)

※連絡先不明者6名、未納退会希望者・会員一時資格停止者33名を含む。

(2022年度：701名、2021年度：712名、2020年度：714名)

2023年度からの新入会者：33名 (一般：19名、学生：14名、団体：0)

■会費納入率 (2023年10月17日時点)

2023年度：完納520名 未納152名 計672名 77.3% (切り捨て)

※連絡先不明者6名含む、未納退会希望者・会員一時資格停止者33名を除く。

(2022年度：92.1%、2021年度：96.7%、2020年度：94.2%)

■新規入会者(2023年6月24日～2023年10月17日) 7名

	入会年月日	氏名	所属	会員種別	推薦者
1	2023/6/29	小宮 全	東京交通短期大学	正会員	事務局
2	2023/6/29	安齋 律子	兵庫教育大学 大学院	学生会員	事務局
3	2023/7/1	前場 裕平	高松市立牟礼北小学校	正会員	根津朋実
4	2023/7/19	内田 直義	就実大学	正会員	事務局
5	2023/7/27	幸阪 創平	東京学芸大学附属竹早小学校	正会員	事務局
6	2023/8/3	曾根原 和明	東京都品川区立大井第一小学校	学生会員	事務局
7	2023/9/30	大西 美輪	高松市総合教育センター	正会員	根津朋実

■退会者(2023年6月24日～2023年10月17日)

なし

2. 寄贈図書等一覧 (2021年6月11日～2022年11月17日到着分)

著者名	タイトル	出版社等	発行日	受領日
八田幸恵・渡邊久暢	深い理解のために 高等学校 観点別評価入門	学事出版	2023/9/11	2023/9/26
渡邊雅子	「論理的思考」の文化的基盤 4つの思考表現スタイル	岩波書店	2023/9/26	2023/10/5

3. 会計途中報告(2023年4月1日～2023年9月30日)

収入の部

項目	予算額(円)	実績(円)
学会年会費	5,000,000	3,978,000
入会金	60,000	80,000
学会誌代・雑収入・利子等	50,000	28,517
第34回大会収入(除く補助費)	900,000	1,069,000
寄付	0	0
前年度繰越金	12,142,694	12,142,694
合計	18,152,694	17,298,211

支出の部

項目	予算額(円)	実績(円)
第34回大会支出(除く補助費)	2,000,000	785,324
第32号・第33号紀要刊行費(含む発送費)	1,400,000	581,900
学会賞費(奨励賞及び優秀発表賞)	70,000	70,000
会合費(交通費他)	1,300,000	48,840
事務局経費	150,000	103,712
事務局外部委託費	1,600,000	338,348
財)日本学術協力財団賛助会費	50,000	0
教育関連学会連絡協議会会費	10,000	10,000
各種委員会経費		
紀要編集委員会	100,000	0
国際交流委員会	100,000	108,825
研究委員会	300,000	36,173
広報・若手育成委員会	300,000	0
学会賞委員会	100,000	0
(小計)	900,000	144,998
理事・代表選挙経費	410,000	0
学会業務の委託先変更に伴う初期経費	600,000	0
投稿システムの導入経費	350,000	0
予備費	200,000	0
次年度繰越金	9,112,694	15,215,089
合計	18,152,694	17,298,211

4. 令和5年度（2023年度）分会費納入のお願い

今年度分の年会費が未納の会員の方は、納入をお願い申し上げます。2023年10月17日時点での2023年度会費の納入率は77.3%です。納入促進に、会員みなさまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

また、前年度（2022年度）分までの年会費が未納の会員の方におかれましては、未納分の年会費の納入もあわせてお願い申し上げます。

会費納入状況につき、ご不明の点がございましたら、ご遠慮なく（株）ガリレオ・日本カリキュラム学会会員窓口までお問い合わせください。

（年会費：一般8,000円、学生5,000円、団体10,000円）

【入・退会、年会費納入、会員web管理、会報発送等各種問い合わせ先】

〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401

（株）ガリレオ学会業務情報化センター内

TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852 ※電話受付 平日11:00~16:00

E-mail : g050jscs-support@ml.gakkai.ne.jp

【上記以外の学会運営に関する問い合わせ先】

〒448-8542

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 愛知教育大学 竹川慎哉気付

日本カリキュラム学会事務局

E-mail : jscsstaff@gmail.com

※2022年4月1日をもちまして、学会事務局のメールアドレスを変更いたしました。

【学会ホームページ】

URL : <http://jscs.b.la9.jp/>